

うるわし通信



令和8年9月

一般社団法人
うるわしの桜井をつくる会
〒633-0091 奈良県桜井市
桜井 1259 エルトさくらい内
TEL&FAX:0744-43-7773
RL: <http://lets.some.jp>
-mail: lets@some.jp

認定こども園設置へ動き出す 『みなみこども園』 令和10年度末開園へ

うるわし通信編集部では、標記の取組状況について、市役所担当課長に進捗状況と共に、今後の子育て支援策について、聞かせてもらった。その概要について紹介すると共に、就学前教育の今後について考えたい。

急速な少子化の進行のもと、市立保育所・幼稚園施設の老朽化への対応と子育ての多様化するニーズに応えるため、施設の統廃合を進めて「市立認定こども園」の設置が動き出している。今「旧学校給食センターと旧桜井南幼稚園跡地」に、第2保育所と安倍幼稚園を統合した定員180名の『みなみこども園』を2029（令和11）年3月開園、同年4月入園に向けて作業が進められており、今後は桜井西部や北部地域で同様の認定こども園設置の計画がある。現在は、保護者や設置地域地元住民への「説明会」が今年2月と8月におこなわれており、その状況については市役所ホームページで紹介されているので、確認頂きたい。



みなみこども園イメージ図

「認定こども園」への移行は、何故？なのか。核家族化や共働き世帯など就労形態の変化に伴い、幼稚園児の急速な減少と、保育所での入所待機児の存在は、就学前教育の在り方の課題となっている。以前より幼保一元化での取組みについては提起されてきたが、文部省と厚生労働省の縦割り行政や、公立と私立での違いなどで、その具体化は進まない状況となっていたが、急速な少子化の進行の下でその課題への早急な対応が求められてきた。奈良市では県内でもいち早く「認定こども園」への移行が進められてきたし、市内の私学の幼稚園でも「こども園」の設置を進めてきた中で、市の就学前教育でも具体的対応が求められるようになって来たと言える。

しかし、制度移行を、施設の統廃合（保育所・幼稚園の施設は統合で減少）だけでなく、地域の子育て支援の拠点施設としての役割を果たしていくことへの対応が求められる。

人口減少への対応は全市的課題である。観光等を通じた交流人口の増加策と共に、30～40代の子育て世帯が転入し易い支援策がどのようにおこなわれているかの自治体間競争が、SNS等で情報交換される時に、就学前教育と学童保育等は、共働き世代の大きな関心事であり、判断材料の一因となる。

『みなみこども園』の開園に向けて、また今後の他の市立認定こども園の設置に向け、関係者のみの問題とせず、市政70周年を迎えた市の活性化策としての教育・子育て支援施策を考えていくことが必要となっている。

(編集子 楠)

「読み書き算」を徹底 「夏休み子ども勉強講習会」

「桜井子ども文化・教育を協働する会」は、7月24日から8月27日まで全8回、桜井市立図書館にて、桜井市の小学2・3年生を対象に「夏休み子ども勉強講習会」を開催しました。

（主催：同会、後援：奈良県、桜井市、桜井市教育委員会）

同会からのご依頼を受け、教材・カリキュラムの作成から授業運営まで、私が主宰する学習塾が全般を担当させていただきました。参加費は無料。定員30名が2日半で定員に達するという盛況ぶりでした。



この講習会で大切にしたのは、「読み書き算」の徹底です。近年、学習指導要領によるカリキュラムでは学ぶべき内容が増え、学校

の授業だけでは基礎の反復や演習に十分な時間を割きにくいという実情があります。そうした事情を踏まえながら講習内容を組み立て、算数では「百ます計算」や図形の書き写し、文章題、国語では音読、視写、語順並べ替え、文章題と、繰り返し丁寧に演習を重ねました。

回を追うごとに子どもたちの集中力は高まり、できることが増えていきました。



講習の途中には授業参観の日も設け、学ぶ様子を保護者の皆様に見ていただいたほか、家庭学習で心がけていただきたい点を、ミニ保護者会という形でお伝えする機会も持ちました。

主催の「桜井子ども文化・教育を協働する会」は、日本最初の国立劇場と伝わる桜

井市の史跡「土舞台」を守り、伝統芸能の発展を伝える土舞台顕彰会の分科会です。土舞台は、聖徳太子が百済から伝わった伎楽の舞を少年たちに習わせた地とされます。太子がものを教えた場であればこそ、子どもたちに教育や文化を伝える活動もまた大切にしたいとの思いから、この講習会を企画されました。子どもたちの真剣に学ぶ姿が、1400年も昔の少年たちの学びと結びついているという浪漫に浸った夏でした。

（寄稿：桜井子ども文化・教育を協働する会 上江洲康司）

保田與重郎と長谷寺の関係

奈良県桜井市出身の文芸評論家・保田與重郎（1910年-1981年）にとって、故郷である大和の風土や古寺は、自身の文学と精神の根源をなす揺籃の地である。そのなかでも、同じく桜井市にある長谷寺は彼の歴史観や美意識を語る上で非常に重要な意味を持つ場所である。保田與重郎と長谷寺のつながりについて、いくつかの側面から紐解くことができる。

1. 著書『長谷寺』と大和への讃仰

長谷寺からの強い勧奨を受けて書き下ろされたのが、紀行文・評論風土記である『大和長谷寺』（1965年）である。のちに『山ノ邊の道』などとともに『保田與重郎文庫』の一冊などに収められている。

この作品をはじめとして、保田は生国である大和の歴史、古寺、そしてそこに息づく人々の営みを、独自のロマンティズムと深い叙情をもって讃え続けた。彼にとって長谷寺は、単なる観光地や歴史的建造物ではなく、日本の歴史や風土に深く根ざした「心のふるさと」であり、日本人古来の祈りの形が宿る場所であった。又、戦前の「日本主義」の立場から、立ち位置を変えた作風の作品でもある。

2. 「国の初め」の風土としての長谷寺周辺

保田與重郎の文学の根底には、大和の山河や古社寺に宿る「日本の古層」への強い傾倒がある。桜井の地（初瀬や山の辺の道など）は、記紀神話の舞台や古代ヤマト王権の中心地に近い、いわば「日本の原風景」が広がる場所である。

長谷寺のある初瀬の谷は、古くから多くの歌人が訪れ、『万葉集』や『古今和歌集』などの歌枕としても親しまれてきた。保田は、そうした詩歌の歴史や、長谷寺の観音信仰に代表される民衆の素朴で深い祈りの歴史を重ね合わせ、近代化の波の中で忘れられかけていた「日本の魂」をこの土地の風土に見出そうとした。

3. 日本回帰とロマン主義の拠点

保田は昭和初期に文学グループ「日本浪漫派」を主宰し、西洋の近代合理主義に対する批判や、日本独自の古典美・伝統の再評価を掲げた。彼のそうした思想的背景には、幼少期から親しんだ大和の自然や、長谷寺をはじめとする古寺の厳かな佇まい、そこを包み込む悠久の時間に対する深い共鳴があったといえる。

保田與重郎にとって長谷寺は、自らの血肉となった生国・大和の美の象徴であり、失われゆく日本の精神的支柱を問い直すための、極めて大切な祈りと回想の舞台であった。

4. 長谷寺の動向

今年は長谷寺開山（727年）から1300年記念行事として、本堂（国宝）内陣での十一面観音菩薩像の直接拝観や国宝銅板法華説相図などを一堂に集めた特別寺宝展などの特別事業を順次展開しているほか、五重塔の修復落慶法要などが3年間にわたり実施される。

（事務局 船谷）



国宝銅板法華説相図

桜井市に寄贈された金塊が現金化される

本年6月に桜井市は市内に住む70代の男性から金塊20kg（時価約3億3000万円）の寄贈があったと発表し、寄贈者の意向に沿うように防災施策などに活用することを検討するとしていた。この度7月16日に寄贈された金塊20kgのうち10kg（1kg10本）が一般競争入札によって2億3千万円で落札されました。今後は寄贈者の意向に沿った防災政策が提案される事を期待している。



寄贈された金塊20kg=同市提供

桜井図書館友の会

月日：令和8年9月26日（土）

テーマの本：『人間の大地』サンテグジュペリ（著）

時間：午前10時～12時

場所：桜井市市民活動交流拠点会議室（エルト桜井2階内）

問合せ先：南部 ☎ 0744-43-5949 会員以外の参加も歓迎します。



編集後記

奈良も関係するNHK大河ドラマ『豊臣兄弟』を見ておられる方も多いと思うが、これからは豊臣政権が確立し、秀長を城主とする大和国・和泉国・紀伊国を領地とする100万石の郡山城が造られる時期を迎える。郡山城に入城するにあたり奈良まちの商工業者を、そして多武峰の妙楽寺（現談山神社）を強制的に郡山に移転させてまちづくりが進められた。藤原鎌足公（大職冠）のご神霊をまちの鬼門の守り神として1587年に社殿を造営し強硬に遷座させた。移った後も帰山運動がおこなわれ、秀長の病気もあって3年後に多武峰の元の場所に戻されたとのことで、移転後の跡には現在も大職冠鎌足神社がある。他方、秀長は当時荒廃していた長谷寺の本堂を1588年（天正16年）に再建して、紀州の根来寺の学頭・専誉僧正を初瀬に招いて、今日の真言宗豊山派へとつながる礎を築いている。境内には、秀長の供養塔が建てられ長谷寺の復興を支えた人物とされている。

（編集部）



豊臣秀長の供養塔

うるわし通信発行人
ひがし俊克
TEL:090-3652-8104